「アイシャ!?」

目を覚ますとそこには股を大きく開かれ、まだ幼い蕾を散らされたアイシャの姿がありました

「よおぉっと起きたのか」

「そんな、約束が違います!!」

「いたっ やめて」

「へバっちまった母親の分は、当然娘に受けてもらわないとなぁ?」

「ぐずっいたい!!」

「お股が壊れちゃう…やだぁぁっ…お母さぁぁんっ!!」

「ああ…アイシャ…」

「待ってろ、今その未熟マンコに赤ちゃんの素入れてやるからよぉ」

「やだ、いらない、いらないからぁ!!」

「しっかり見てろ!」

「娘がママになる様をなぁ!」

「お願いします! それだけは!!」

「やだやだ…っ!!」

「やぁだ"あ"あ"あぁぁぁっ!!」

やめてっ！
やめてください！
その子は…まだ幼いんです!!

うるせえ!!

お前がへばらず
しっかり俺たちの
相手をしていれば
娘が犠牲に
ならなかったんだよ

幼い体を持ち上げられ
口と膣内、両方を乱暴に
犯されていくアイシャは…

うめき声とも言えない
声を上げながら、
その剛直を受け入れるしか
ありませんでした

出るっ!!

ぶぴぴ

アイシャの体は
激しく痙攣し…

堅く閉じられていた
秘所からは、
入りきらなった
男たちの子種で
溢れていました…

これで、アイシャちゃんも
大人の女に
仲間入りできたねぇ

はい

はー

ああ…アイシャ…

お願いします…
もう…もう…やめて…

やめる？
何言ってやがる

これからだろうが!!
母娘仲良く犯されろっ!!

まだまだ後ろが
控えてるんだよ!!

おお

おお

おお

今度は俺の番だ!!

ガキの方は
俺に犯らせろ!

キンタマ
空っぽになるまで
犯してやるぜ!!

おお

オラこっちへ来い!

いやぁっ!!

ぎゅっ

ぎゅっ…

マンコもーらいっ

ぐちゅ

ミチ

やめ!!

じゅぼ

じゅぽっ

じゅぽ

ぶぁ!!

んっ!!

んっ!!

血走った彼らは
一斉に私とアイシャを
犯し始めました

ぐぃ

ぐに

ゴッ

メチメチ

ぐぽっ

ぐぽっ

ぐぽっ

ぐぽっ

誰の子種で孕ませるのか
まるで競うように…

何度も

何度も

ただ、受精の恐怖に怯えながら

私たち母娘は彼らの欲望を迎え入れるしかなかったのです

——あれから数か月——
私とアイシャはおよそ数えきれないほどの男達の欲望をその体に受け止めさせられました。
女である私達の子宮はその欲望を拒絶することはできず
当然のごとく誰のモノともしれない種であっという間に孕まされ…
誰のものとも知れない子がお腹の中で育っている…絶望感…
それでも、ここから抜け出せることを信じて必死に耐えていました…
でも…
ついに先日アイシャの妊娠が発覚……
最後の希望を摘み取られた私の精神は…絶望という闇に飲まれてしまいました。
ゼニス様…
パウロ様…
そしてルーデウス様…
ルーデ…
もう…し…
…申し訳ありません……
私たちは……
もう……